

自覚の事実とその展開

——後期西田哲学における自覚の問題——

白井 雅人

序

「自覚」という語は、日常的にも用いられる語である。例えば、「教師としての自覚に欠けていた」などという反省の弁を耳にすることもあるだろう。我々は日常的に、自らの役割を自覚しながら、その場に合った行為をなす。そういった意味で、我々は常に自覚しながら生きているともいえるだろう。だが、西田哲学における自覚の意味は、そのような日常的な意味に尽きるものではない。学問の方法、哲学の方法としても「自覚」が主題化されるのである¹。このように「自覚」は、我々の日常的経験から哲学の方法まで貫く、西田哲学の重要概念であると言える。本論稿では、こうした自覚の概念を問題にし、後期西田哲学における「自覚」の働きについて、様々な側面から明らかにすることにした。

自覚の問題に関して言えば、西田哲学にとって「自覚」は重要なトピックであったが、主に前期の『自覚に於ける直観と反省』との連関で取り上げられることが多く、それはいわば「場所」へと至る過渡期の問題として扱われるに留まることが多かった²。また、後期の「自覚」を扱う場合は、学問論としての「自覚」が主題化され、それが日常的経験までも貫くものであることが見過ごされてきた。

以上のような問題意識に立ち、西田における「自覚の事実」の内実を検討し（第一節）、日常的経験としての自覚を解明する（第二節）。さらに学問論としての自覚の問題を取り扱う（第三節）。さらに、哲学の方法論としての自覚の問題を論じる（第四節）。

1 自覚の事実とは何か

西田幾多郎は、その後期哲学において、自覚を疑いえない事実とした。「自覚」の概念を解明するために、まずはこの「自覚の事実」の内実を検討しよう。

西田が自覚の事実について述べるのは、哲学の出発点との関係においてである。西田は、最晩年の論文「自覚について」（1943年）の中で、「哲学は我々の知識及び行為の根源を明にする学として、疑うて疑ふことのできない立場から出立すべきであると思ふ。哲学は第一原理の学でなければならない」（10-557）³とする。つまり、西田にとって哲学とは、第一原理の学としてそこから様々なものが展開されるべきものなのである。それ故、様々なものが展開されるべき出発点は、「疑うて疑ふことのできない立場」として揺るがないものでなければならないということになる。というのも、疑い得るような出発点ならば、その後の展開も疑い得るものになってしまうからだ⁴。

西田のこのような哲学の性格付けから、「考える自己」が含まれるのが哲学であることが導き出される。考える自己が欠けているならば、そこから様々なものが展開される「第一原理の学」とはなり得ない。だが「考える私」が「考える私」を考えるということは可能なのであろうか。この疑問に対して、西田は「(……)我々は自覚の事実を否定することは不可能であり、自覚の事実に於て、考へるものを考へると云ふことは、対象論理的に既に自己矛盾である」（10-557）と答える。ここで西田が対象論理と呼ぶのは、客観的な対象について記述する論理のことである。主観に対する客観について語る論理であるため、主観そのものについて語ることはできない。それ故、対

象論理の立場では「考える自己」について記述することができないのである。

では、「自覚の事実を否定することは不可能」と言われる際の「自覚の事実」とはいかなるものであろうか。西田の記述をもう少し追ってみよう。対象論理を越えた立場について西田は以下のように述べる。

それは歴史的自己のポイエーシスの自覚の立場、創造的自己の自覚の立場でなければならない。我々がかかる立場から自己を反省するのである。此に疑うて疑ふことのできない出立点がなければならない。而してそれは自己から出立することではなくして、世界から出立することである。何となれば、自己と云ふものは働くものとして、世界の立場から反省せられるものなるが故である。疑ふと云ふこと自身が、この世界に於いてのことではなければならない。(10-557)

まず目に付くのは、自己を自覚することが、「ポイエーシスの自覚」や「創造的自己の自覚」として可能になると言われていることである。ポイエーシス的ということは、制作的ということであり、ものを作ることによって自覚するということである。しかもその自覚は、「働くもの」としての「世界の立場」から自覚されると言われている。この時の働きとは、「ポイエーシス的」とか「創造的」と言われているような制作的なあり方を意味しているだろう。しかもそれは、自己から自己を見るような自覚ではなく、世界から自己を見るような自覚ということになる。

西田の「自覚の事実」の内実についてまとめてみよう。まず自覚の事実とは、客観的な対象を記述するような「対象論理」によって可能になるものではない、ということである。さらに、「ポイエーシスの自覚」や「創造的自己の自覚」と言われるように、製作する働きの中でなされる自覚ということである。そして最後に、そのような自覚は、自己から出立するのではなく、世界から出立する自覚であり、いわば世界から自己を見出すような自覚である、ということである。次節では、働くことと世界から自己を見出すということについて、論じることにしよう。

2 作ることと自覚すること

西田は、論文「自覚について」の次に発表した論文「物理の世界」(1944年)において、論文「自覚について」の議論を短くまとめて、以下のように述べる。

我々の自己は作り作られるものとして自覚するのであり、客観的認識とは、作り作られる世界の自己限定として成立するのである。内と外との矛盾的自己同一と云ふことが、作り作られると云ふことであり、そこに世界が自己自身を限定するとして、映し映されると云ふことがなければならない、世界が自己自身を映す、世界の自覚と云ふことがなければならない。我々の自己の立場から云へば、そこに働くことが見ること、見ることが働くこととして、歴史的身体的に、行為的直観的と云ふことである。我々が行為的直観的に物を見ると云ふことは、そこに世界が世界自身を映すことである。我々の自覚は世界自身の自覚であるのである。(11-21)

かなり圧縮された文章であるが、「作り作られるもの」として自覚があるという点は、前節で見たように制作の働きの中で自覚が起こるということである。この自覚には三つの特徴があることになる。第一に、この制作の働きは、「内と外との矛盾的自己同一」とも言われ、「映し映される」とも言い換えられる。第二に、この作り作られる働きが「行為的直観」として「働くことが見ること、見ることが働くこと」であるとも言われる。第三に、世界が世界自身を映す世界の自覚とも言われる。

この三点の意味を明らかにするために、まずは二番目に挙げられた行為的直観について簡単に見ていくことにしよう⁵。行為的直観とは、「働くことが見ること、見ることが働くこと」とされる。このことは、日常的な我々の経験に即して考えられる。我々の行為は、常に見ること(直観)と共に可能になる。例えば家を建てる場合を考えよう。家を建てるためには、まず家を建てる場所を見る必要がある。日当たり、水はけ、地形、気候などの客観的条件を考慮しながら家の設計図が描かれる。そして、その客観的な条件に合った建築資材が選ばれ、家が建てられ

る。家を作るという働きはまさに、見ることを通して可能になる。だが同時に、このような「見る」ということは、家を建てるという働きなしにはあり得ない。我々が家を建てようとしたからこそ、その土地の客観的条件を見たのであり、それにふさわしい建築資材を見たのである。そういった意味では、「見る」ということは作るという働きの中で可能になっているのである。また、家を建てるという働きを通して、建てられた家を見ることになる。

以上のように、「働くことが見ること、見ることが働くこと」とは、見ることによって物を作ることが可能になり、作るということを通して物が見られるということの意味する。

さて、このような行為的直観が、「作り作られ」る「内と外の矛盾的自己同一」と言われるのはなぜであろうか。先の引用の第一の点について、引き続き家を建てるという例をもとに考えてみよう。「作る」ことは、「作られたもの」から始まる。我々が家を建てようとするとき、全く無から家というものを考え付いたのではない。人がある場所に定住する際に家を建てるという伝統があり、その伝統の中で我々は家を建てようとするのである。たとえば遊牧民は、家を建てずにテントを張りながら、家畜と共に移動していく。家を建てるという我々の「作る」という働きは、社会や歴史の中で規定されたものなのである。それ故、社会的・歴史的に「作られた」状態から出発して、我々は物を作るのである。しかし同時に、我々は今までなかった新しい家を建てる。これまで作られてきた様々な家を参照しながら、新しい自分のアイデアや技術を取り入れた新しい家を建てるのである。このような意味で、我々は「作られたもの」から「作るもの」へと転換し、社会や歴史に新たなものを加えていくのである。

このような「作り作られる」働きは、内と外とが結合する働きであるとも言える。家を建てるように我々を動かす社会的歴史的な伝統、家を建てるために必要な様々な客観的条件、そういった我々にとって外なるものと、我々が家を建てたいという内なる要求が一つになって家というものが建つ。実際に立った家は、家を建てるという社会の歴史的伝統や家の可能性を制約する外的条件を表現している。だが同時に、我々の家を建てたいという内的な要求の表現でもあり、自分のアイデアを反映した、自己表現でもある。そういった意味で、内なるものと外なるものが作ることを通して結び付くのである。

このような結びつきが、「矛盾的自己同一」の「同一」の意味である。だが、「矛盾的」と言われていることに注意しなければならない。社会的・歴史的に規定されているということ、外的な条件によって規定されているということは、我々の自己の恣意は何処までも否定されるということの意味する。自由に、好きなように家を建てることは不可能である。自己がすべてを支配し、意のままにできないという点で、我々の自己を否定するものとも言える⁶。しかし同時に、いくら家を作る伝統があり、外的条件が整ったとしても、我々の自己なしに自然と家が建つことはあり得ない。しかも、新しく建てられた家は、自分なりのアイデアが反映された、今までにない新しい家であり、二つとない唯一の家でもある。つまり、我々が家を建てるということは、そこに家がないという所与の現実を否定し、我々の自己表現としての家を新たに加えるということの意味するのである。与えられた現実、我々の自己を否定する。しかし同時に、我々は与えられた現実を否定し、新しい家を建てるということによって現実を刷新するのである。

さて、このような「作り作られる」ということによって、どのような自覚が生じるのだろうか。それは、「映し映される」と言い換えられている点から理解できる。我々の自己の表現として作り出された家を通して、我々は自己を自覚するのである。我々は現実に作られた家を通して、「自分はこんな家に住みたかった」ということに気付くのである。あるいは逆に、現実に作られた家に対する不満を通して、「本当は、自分はこんな家ではなく、違う家に住みたかったのだ」ということに気付く。我々の自己は、作られた家を通して、自分がどのような家に住みたかったのか、真に自覚できるようになるのである。我々が作り出した家が、我々の自己を表現するものとしてある時、我々の自己を映す鏡として機能する。我々は、自らが作り出したものを鏡として、そこに映る自己を自覚するのである。それ故、西田は、以下のように述べるのである。

我々の真の自覚と云ふのは、自己の内に反省することによつて成立するのでなく、却つて自己を外に映すことによつて成立するのである。作られたものと作るものとの矛盾的自己同一の立場から、表現的形成的に（行為的直観的に）、真に個人的自己として自覚するに至るのである。（10-421）

我々は、自己表現として自らが作り出したものを通して、自己自身を自覚するのである。作り出したものに自己を映すことによって、自己自身を知るのである。だがここで注意しなければならないのは、「世界が自己自身を限定するとして、映し映される」と言われている点である。我々の自己表現であるだけでなく、世界を映す世界の自己表現でもあるのである。この点は、第三の「世界の自覚」に関わる点である。このことについても、詳しく見ていこう。

家を建てるということは、我々の自己表現であるだけではない。先の遊牧民の例でもそうだったように、家を建てるということは、社会的・歴史的状況を映し出してもいる。遊牧民という社会的状況であれば家は建てない。家を建てる社会的・歴史的な背景を表現しているのである。また、木造の家を建てるということは、レンガ造りの家を建てる伝統とは異なる伝統に属しているということも表現している。しかも、現代世界の技術を反映した、現代の世界を表現している。一昔前であれば茅葺だったかもしれない屋根は、ソーラーパネルの屋根となっている。それは現代の技術を表現し、また再生エネルギーを重視する現代の趨勢も表現している。こういった意味で、家を建てるということは、世界を映しているということでもある。しかも、家を建てるという出来事自体も世界の出来事であるので、家を建てるということは、世界の中で世界を映すという事態を意味することになる。このような意味で、「我々が行為的直観的に物を見ると云ふことは、そこに世界が世界自身を映すことである。我々の自覚は世界自身の自覚であるのである」と言われるのである。我々の様々な行為は、世界の中で世界を表現する行為であり、我々が自覚するということは、世界の中で世界が自覚するということをも意味するのである。そういった意味で、我々の自己は世界を映すものであり、西田の言葉を使えば我々の自己が世界の「射影点」となるということも意味する。

だが、家を建てるのは特別な経験であり、日常的な経験ではないという反論もあるかもしれない。西田自身が確かに述べているわけではないが、おそらく「歩く」ということにも行為的直観的な自覚がある。例えば歩くということは、路面の状況、道の混雑状況、天候の状況を見ながら歩く。様々な自己の置かれた状況を自覚しながら、人は歩くのである。しかも、舗装されていない大昔の街道を歩くのと、現代の舗装されている道を歩くのでは、歩き方も変わってくる。そういう意味で、現代の世界を表現する歩き方にもなっている。また、人は歩くことによって「足が痛い」や「疲れている」などの自己の体調を発見したりする。そういった意味で、歩くという最も日常的な動作でさえ、自覚は働いている。

以上のような日常的な経験における自覚の検討において、以下のことが確認された。我々は物を作るということを通して、自己表現をし、自覚する。しかもこの自己表現は、世界の中の出来事として、世界の表現、世界の自覚でもあるのである。このような自覚は、しかし日常的経験に留まるものではない。科学の方法としても自覚が考えられる。次節では、科学と自覚の問題を検討することにしよう。

3 科学と自覚

科学の方法としての自覚を明らかにするために、まずは自覚の形式的構造から問題にしていくことにしよう⁷。西田は自覚の形式について、「先づ何処かに、何等かの仕方に於て、表現するものがせられるものであるといふ自覚的實在の形式がなければ、表現と云ふことは成立せないのである。我々の働きと云ふものは、すべてかかる自覚の形式から成立するのである」(10-482)と述べる。「表現するものがせられるものである」というのは、表現する我々の自己(表現するもの)と、我々の自己表現として作り出されたもの(表現せられるもの)が同一であるという意味である。前節で見たように我々の自己が、我々の自己によって表現されたものを通して自覚するならば、我々の自己によって表現されたものも、私の自己表現として私と一つであるということも意味しているのである。逆にまた、世界の表現としての我々の働きは、世界と一つになっているということも意味している。

このような表現的な関係を西田は、「先づ一方が多が何処までも一を表現すると考へなければならぬと共に、一方に一が何処までも多を表現すると考へなければならない」(10-481f.)と簡潔に述べている。この時、多は「個物的多」、つまり個物としての我々の自己を意味する。我々は様々な個物と関わりながら生きてるので、個物は多とされるのである。一方、一は「全体的一」を表している。全体を一つのものとしてまとめたものである。個物

的多の自己表現の総体が全体的一であるならば、一が多を表現していると考えることができる。だが同時に、我々の行為は、我々を取り巻く全体の文脈を表現もしている。そこでは多が一を表現していると考えられることもできる。

個物的多が全体的一を表現していることについて、西田は「多が何処までも一の表現となると、それは記号的とならなければならない。それが論理の世界、認識対象界である」(10-492)と述べる。一方、全体的一が個物的多を表現しているときには、「個物的多は何処までも原子的であることはできない」(10-492)。というのも、個物が全体を構成する原子ならば、全体的一は原子の「結合とか統一とか云ふものでなければならない」(10-492)のであり、多を表現するものとはならない。多を表現している限りでは、「一度的な事実、絶対の事実と考へられるものでなければならない。絶対に無基底なるが故に、それは一度的として消え去るものでなければならない。消え去ることによって生きるもの、即ち絶対の否定を媒介として、自己自身の表現に於て自己自身を有つもの、絶対の他に於て自己自身を有つものでなければならない」(10-493)。このようにして、歴史的世界は、「一の立場から世界が何処までも記号的に表現せられるとともに、多の立場から一々が絶対の事実と考へられる」(10-493)のである。

以上のような関係が何を意味しているのか、もう少し詳しく見てみよう。「多が一を表現している」という場合、それは個物的多のそれぞれの個性が捨象され、それぞれが一なるものを表現していることになる。このように考えられた場合の世界は同時に論理の世界とか、認識対象の世界とも言われる。一方、全体的一が個物的多を表現していると考えれば、そこで現れる全体的一は、個物的多によって形成されるような「一度的な事実」となっている。

個物的多は、それぞれ唯一の個であり、それぞれの表現は唯一の表現になる。それ故、決して繰り返すことのできない「一度的な事実」としてあることになる。つまり、個物的多の自己表現とは、それぞれの唯一の一度限りの生を表現したものとなっているのである⁸。一方、多が一を表現するという事は、そのように消え去るものが「作られたもの」として形を持つということ、対象化することの出来るものとなるということである。その都度限りの一回性、個性が捨象され、ある特定の形を持ったものとして把握可能なものとなるということである。それ自身形のないものが自らを否定して形をとる、把握できないものが自らを否定して把握できるものとなるのである。それ自身基体的ではないものが、自らを否定して主語的に把握できるようになる、つまり一度的で流れ去るもの、「非論理的である」(10-493)ような歴史的世界は、自らを否定して「論理の世界」、「認識対象の世界」となるのである。ここに科学的な認識の世界が成立することになる。この科学的な認識の世界について、もう少し詳しく見てみることにしよう⁹。

西田は知識の成立について、「知ると云ふこと、即ち知識と云ふものの成立を、(……)歴史的世界が自己の内に自己を映すと云ふことから考へたいと思ふ。(……)我々の自己が世界を映すことは、逆に世界の一観点となることである。これが知ると云ふことである」(10-437)と述べる。記号的、論理的認識とは、我々の自己が世界の一観点となるということ、自らの主観的な思いなしを捨てて世界をそのままに映すことを意味する。「科学的否定とは、行為的直観の立場から我々の自己の因習的な先入見、独断を否定することではなければならない。(……)故に科学的知識の成立には、先づ行為的直観の立場がなければならない」(11-154f.)。自覚とは、自らの思いなしや偏見を否定し、世界をありのままに映すことによって、自らがそこに於てあるような世界を知るという働きを有するのである¹⁰。

こうして、我々は自己を否定し、一を映すことで、唯一の自己という性質をも消し去り、代替可能な記号となっていく。ここに記号操作の世界が開かれ、科学的な学的世界が構築されることになる。様々な学的世界の展開について詳論する余裕はないが、西田が数学と物理学について述べていることを簡単に紹介しよう。数学について西田は、「数学と云ふものが、創造的方向とは逆に、世界の自己否定的立場に於いての、純なる記号的表現の形式」(10-548)と述べたり、「数学は思惟作用そのものの行為的直観である」(10-550)と述べたりしている。我々の自己が否定され、単なる記号的なものとなるとともに、世界が徹底的に形式化される。その形式の関係を展開する学として、数学は思惟作用そのものの行為的直観と言われることになる。一方物理学は、「最も具体的な実在の記号面的自己表現」(10-549)と言われる。具体的に実験や観測によって明らかにされるものを記号化するような学問として、物理学が考えられるのである。

以上のように、記号化される自己の自覚の中で諸学が展開されるのである¹¹。しかし、哲学が扱うのは記号化された自己ではない。次節では、哲学と自覚の関係を見ていくことにしよう。

4 哲学と自覚

第1節で見たように、第一原理の学としての哲学は、考える自己を含む実在を問題にする学であった。一方、科学的な諸学問を構成するのは、記号化された自己であった。そのため、考える自己を含むような実在を科学的な諸学問は解明できない。それ故西田は、「かゝる実在が明にせられるには、否、かゝる実在が自己自身を明にするのは、絶対否定的自覚によるの外はない。(……) 哲学はかゝる立場に於て、知識の根本原理を把握するのである」(11-153)と述べる。ここではっきりと打ち出されるのは、科学的な方法としての自覚とは異なる、「絶対否定的自覚」によって哲学が遂行され、この自覚を通して考える自己を含む実在が解明されるということである。

では、絶対否定的自覚とはどのような自覚であろうか。学問論としての記号化されるような自覚は、多が自己を否定して一を映す立場であった。ここでは多が否定され、一が否定されているわけではない。そのため「絶対」否定ではなく、相対的な否定であると考えられるであろう。絶対否定的であるためには、多を否定するとともに、一の否定をも含む自覚であるということである。「考える自己」とは、一回限りの生を生きるかけがえのない自己であると共に、記号操作を行い思惟する自己である。すなわち、否定的自覚とは、一を否定し個物的多として唯一の生を生きる自己と、多を否定し一なる記号的操作の世界を開く自己、その両者を自覚するような自己である。絶対否定的自覚とは、このように「一を否定する多」と「多を否定する一」の両者を自覚する立場だと言えよう。そして、この一と多の相互否定のダイナミズムこそが、世界の自覚であった。哲学は、いわば世界の自覚的構造を自覚する学問であると言えよう。

つまり、行為的直観の構造を自覚していくのは、哲学の仕事なのである。このような自覚において、「世界が自覚する時、我々の自己が自覚する。我々の自己が自覚する時、世界が自覚する」(10-559)と言われる。「世界の自覚としての哲学の立場は、疑うて疑ふことのできない立場、絶対的自己否定を媒介とする立場でなければならない。かかる意味に於て哲学は真にそれ自身によつて有る絶対有の学である、根本的実在学である」(10-559)。哲学は一を否定する多の立場に立つのでもなく、多を否定する一の立場に立つのでもない。そのような立場に立つことを否定し、その否定を通して一と多の立脚点を明らかにするのが哲学の仕事なのである。そこにおいて、考える私を含むような全実在を明らかにすることが可能になるのである。

哲学のこのような性格を際立たせるため、学的知の領域と哲学の差を見ていこう。学的知の領域は、「ポイエーシス的自己の自覚」と呼ばれる自覚に基づく。これは、我と物との「作り作られる」関係の中で生じている自覚のことである。西田は、「作つたものは何処までも自己に対立するものである、絶対の他である、しかもそれは逆に自己を動かすものである。かかる意味に於ての矛盾的自己同一の立場から、我々の自己と云ふものが反省せられるのである」(10-558)と述べる。物との関係の中で反省されるような自覚が、ポイエーシス的自覚である。ポイエーシス的自覚について、西田は「(……) 科学的知識の成立には、歴史的事實的に、我々の自己が創造する、我々の自己が作るといふポイエーシス的自覚が伴はなければならない、歴史的自己の自覚が伴はなければならない」(10-552)と述べる。作るものとして自己が成立すること、歴史的な世界が自らを形成する、そのような形成要素として歴史的になるということ、世界の自覚として我々が歴史的にあるということ、そこに科学的知識に基づくのである。

しかし西田はさらに、「ポイエーシス的自己の自覚の根柢には、創造的自己の自覚がなければならない。創造的世界の個物として、我々の自己はポイエーシス的であるのである。何処までも自己自身を限定する絶対的事実としての、我々の創造的自己の自覚に基いて哲学的知識が成立する」(10-561)と述べ、世界自覚としての哲学を創造的自己の自覚と特徴づけ、科学的知識の根柢に置く。哲学の営みは、行為的直観を通したポイエーシス的なものに留まらず、そのような創造的な自己自身をどこまでも自覚していく営みなのである¹²。「哲学は(……) 真に自己自身によつて有り、それ自身によつて自己自身を限定する根本的実在の自己表現の過程として、何処までも否定的自覚、自覚的分析でなければならない。而してそれはすべての実在の根柢、実在の学として、見るものなく

して見る立場、世界が自己自身を映す立場でなければならない」(11-155)。見るものなくして見る立場とは、あらゆる「見る立場」を否定する立場のことである。一の立場に立ち多を否定するのでもなく、多の立場に立ち一を否定するのでもない。「哲学の対象は自己自身を自証するもの、対象なき対象でなければならない」(11-155)。哲学は、ある立場から対象を記述するのではなく、「見るもの」と「対象」の両者がそこから生じてくるような自覚の遂行なのである。哲学は外から基礎付けられるようなものではない。ある特定の領域を問題にするのが哲学ではない。自覚する自己が自覚されるのであるが、自覚の構造を自覚することによって、自覚する哲学の働きそれ自体がそのような自覚の構造に基づいて可能になることも見通される。このようにして哲学は自ら自身を証するのである¹³。

哲学は、あらゆる知識がそこから成り立つ構造、つまり自覚の構造を自覚する。他の諸学問が可能になっているところを明らかにするのが哲学であり、諸学の根柢に哲学があるのである。そして、哲学が諸学の根柢にある世界の自覚の構造を見出すことを通して、哲学それ自身においても自らの自覚的構造が示される。哲学においては、なんら基体をおくことはできない。哲学の外に哲学の根柢があるのではない。我々の自己の自覚の遂行を通して、それが同時に世界の自覚の構造として明らかになっていくことによって、哲学は自証されるのである。「科学の世界は、形が形自身を限定する世界である。その根柢には、見るものなくして見る、世界が自己自身を映すと云ふことがなければならない。哲学が科学の根柢とならなければならない所以は、此にあるのである。是故に科学の方法は行為的直観である。哲学の方法は自覚である」(11-155f.)。諸科学の根柢には哲学がある。哲学には根柢がない。地盤となるような根柢から、対象を記述するのが哲学ではない。否定的自覚として、底なき自己が自らを証していくことが哲学なのである。

結語

本論考では、以上のように、自覚について論じてきた。第一節では、西田における自覚が哲学の出発点と結びついていることが確認された。第二節では、日常的な場面での自覚が、世界の自覚としてあるということを見た。そして第三節で、科学との関わりで自覚を論じた。そして第四節で、自覚は哲学をなす営みとして、世界と自己が共に自覚する働きにまで深められた。ただしこの自覚は、宗教的・神秘的な自覚ではない。むしろ哲学は、どこまでも我々の自己が自己として成立する、そのような自己成立の事実、自覚の事実に徹することによって営まれるものであって、事実以外の何ものも必要とはしないのである。その意味では、西田の言葉を借りれば、哲学は「徹底的実証主義」(11-124)なのである。

また、哲学と他の諸学の知を比較したことについて付言しておくべきかもしれない。確かに、両者の違いによって哲学を際立たせたが、哲学は諸学と並列する学問の一分野ではない。諸学と現実を結ぶ、知識の根本を明らかにする世界の自覚として哲学はあるのである。諸学には底がある。それは世界の特定の形を表現するものとして一定のまとまりをもつということである。学としては、一定の形から形へと無限に探求は進むであろうが、その都度一定のまとまりを持ったものとして知がある。そしてその底には、諸学の根柢には、哲学としての世界の自覚がある。しかし、この世界の自覚としての哲学は、世界の力動性の自覚として決して底のない働き、見るものなくして見る、何処までも世界が深まっていく働きなのである。

凡例

- 1 西田幾多郎の引用は、下村寅太郎他編『西田幾多郎全集』1965-6年、岩波書店、より、巻数-頁数の順に掲げる。なお、旧漢字を新漢字に改めた。
- 2 その他の引用は、本文及び注において、著者名〔出版年〕のように記した。当該の文献は巻末の文献表によって知ることができる。また、全集など再録されたものや改版されたものを参照した場合、文献表の書名の横に（ ）で初出年を記し、〔 〕の中で初出年：再録年の形で表記した。この場合、引用のページ数は文献表にある再録されたもののページ数を指す。
- 3 引用文中の（……）は省略記号である。
- 4 本文中の人名への敬称は省略する。西洋人名は現在において一般的なカタカナ表記法で記したが、西田の引用文中においては西田の表記したとおりにした。

参考文献

凡例に記した西田の一次文献以外の二次文献をここに挙げる。

- 石神豊『西田幾多郎 自覚の哲学』、北樹出版、2001年
板橋勇仁『歴史的現実と西田哲学』、法政大学出版社、2008年
上田閑照『経験と自覚』、『上田閑照集』第二巻、岩波書店、2002年
上田閑照『場所』、『上田閑照集』第三巻、2003年
大橋良介『西田哲学の世界』筑摩書房、1995年
岡田勝明「『映像』としての『自覚』」『日本の哲学』第2号、昭和堂、2001年
小坂国継『西田幾多郎 その思想と現代』、ミネルヴァ書房、1995年
白井雅人「後期西田哲学における論理の場所 ——身体と自覚を手引きにして——」『哲学』59号、日本哲学会、2008年
白井雅人「否定性と当為 ——後期西田哲学の展開に向けて——」『西田哲学会年報』4号、西田哲学会、2007年
白井雅人「私と汝の諸相」『西田哲学会年報』創刊号、西田哲学会、2004年
新田義弘『現代の問いとしての西田哲学』、岩波書店、1998年
新田義弘「現象学と西田哲学とが会おうところ」『西田哲学会年報』第3号、西田哲学会、2006年
三木清『構想力の論理 第一』（1939年）『三木清著作集』第八巻、岩波書店、1948年

注

- 1 学問論、知識論として西田の自覚の問題を取り上げたものとしては、新田義弘 [1998] を参照。新田義弘はそこで、自覚と哲学の問題についてたびたび触れ、宗教に回収されない哲学の思惟の固有の役割について明らかにしている。
- 2 「純粹経験」から「自覚」、そして「場所」に至るまでの西田の歩みを詳しく跡付けたものとしては、上田閑照 [2002]、[2003] が詳しい。
- 3 西田は、『善の研究』においても、「今若し真の實在を理解し、天地人生の真面目を知らうと思うたならば、疑ひうるだけ疑つて、凡ての人工的假定を去り、疑ふにもはや疑ひ様のない、直接の知識を本として出立せねばならぬ」(1-47) と述べている。哲学の出発点を、デカルトに倣って「疑うに疑えない立場」とするのは終生一貫していたと言えるだろう。
- 4 ここにデカルトとの共通点も考えることができるだろう。本論考では紙幅の関係上論じることができないが、西田のデカルト理解を論じたものとしては、石神豊 [2001]、とりわけ第五章「西田哲学とコギトの問題」を参照。ただし、行為的直観と自覚の関係が論じられず、我々の自己の歴史性は問われていない。
- 5 行為的直観についての詳細は、小坂国継 [1995]、69-116 頁を参照。
- 6 西田は、「物が表現的に我に臨むと云ふことは、現在の我、与えられた我を否定すべく、我に迫ることである」(9-33) と述べる。
- 7 自覚の構造については、大橋良介 [1995]、とりわけ第二章第一節「自覚 (二)」において、群論的自覚として詳しく取り上げている。本節の課題は、この群論的自覚を、表現と歴史的世界の関係として具体的に見ていくものである。
- 8 紙幅の関係上詳論できない、個としての自覚に関しては、白井雅人 [2004] を参照。
- 9 本節では主に学問的な認識としての自覚を取り上げた。自覚の「論理」については、白井雅人 [2008] を参照。
- 10 映すという観点で自覚の問題を扱ったものとして岡田勝明 [2001] を参照。西田が自覚について影像という語から映像という語の使用に力点を移していった所に、西田の自覚の問題の深まりを見ていくものである。
- 11 ただし西田は、以上のような議論は「併しそれは主としてその知識的方面を明にするものであつて、真にその實在的構造を明にするものではない。従つてそれから直に実践的方面を論ずることはできぬ」(10-493) のであり、「歴史的世界は、我々の自己の自覚の世界でなければならない。かかる世界に於ては、一々の事実が自覚的なると共に、それは何処までも当為の性質を有つて居るのである」(10-494) と述べ、知識の方面だけでは自覚の問題が尽きないということを強調している。当為については、白井雅人 [2007] を参照。当為を伴う自覚についての議論は、例えば三木清の「ただ東洋の論理が行為的直観の立場に立つといつても、要するに心境的なものに止まり、その技術は心の技術であり、現実には物に働き掛けて物の形を変じて新しい形を作るといふ実践に踏み出すことなく、結局観想に終り易い傾向を有することに注意しなければならぬ」(三木清 [1939: 1948]、11 頁。なお、旧漢字を新漢字に改めた) といった批判に対して応答するものとなるだろう。
- 12 創造的の自己の自覚については、新田義弘 [2006] も参照。行為的直観と創造的直観を区別した上で、どこまでも深く「知の責任性」を負うような哲学的な自覚の営みとして創造的直観を特徴付けている。
- 13 大橋良介は、群論的自覚を鳥瞰する体験を「言語表現を拒むような次元での体験」(大橋良介 [1995]、100 頁) と述べた。しかし、この群論的自覚を鳥瞰するのは、まさしく哲学の自証としての自覚の構造の自覚であろう。